

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 マサバ

学名 *Scomber japonicus*

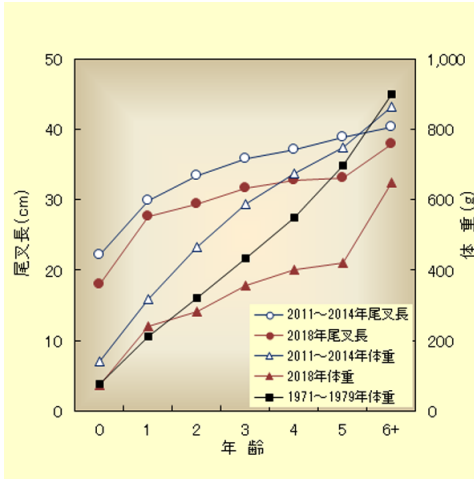
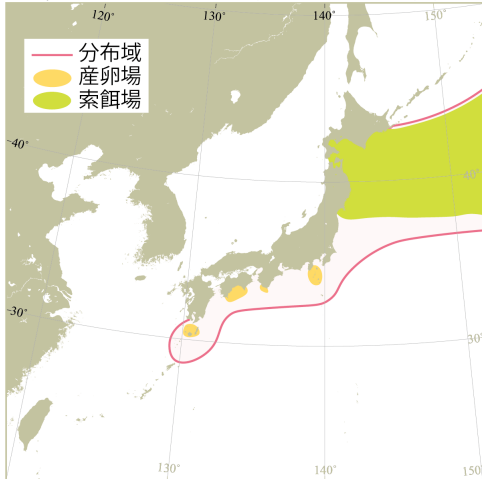
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 7～8歳（最高11歳）
成熟開始年齢： 1970～1975年、2015～2017年は2歳（20%）、1976～1986年は2歳（30%）、2005～2014年は2歳（50%）など、年により異なる
産卵期・産卵場： 1～6月、主に伊豆諸島周辺海域（3～6月）、他に足摺岬、室戸岬周辺や紀南などの太平洋南部沿岸域や東北海域
食性： 稚魚は動物プランクトン、幼魚以降はカタクチイワシなどの魚類やオキアミ類などの甲殻類、サルパ類など
捕食者： サメ類などの大型魚類、ミンククジラ

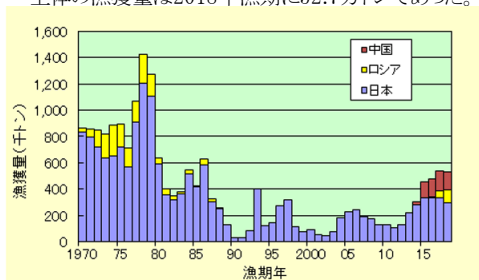


漁業の特徴

大中型まき網は主に常磐～三陸北部海域で9～翌年2月を中心にほぼ周年操業する。道東海域では2012年以降に漁場が形成されている。中型まき網は千葉県以西の太平洋沿岸各地で周年操業する。たもすくいおよび棒受網は1～6月の伊豆諸島海域に越冬、産卵で集群する親魚群を主に漁獲する。定置網は各地で行われ、三陸沿岸での漁獲が多い。

漁獲の動向

我が国の漁獲量は1978年漁期（7～翌年6月）に121万トンのピークに達した後減少し、1990、1991年漁期に3万トン程度まで落ち込んだ。その後は増減を繰り返していたが2013年漁期以降に増加し、2018年漁期は29.8万トンであった。北西太平洋公海域等で2018年に中国が13.0万トン、ロシアが9.8万トンのマサバを漁獲したと推定された。系群全体の漁獲量は2018年漁期に52.7万トンであった。

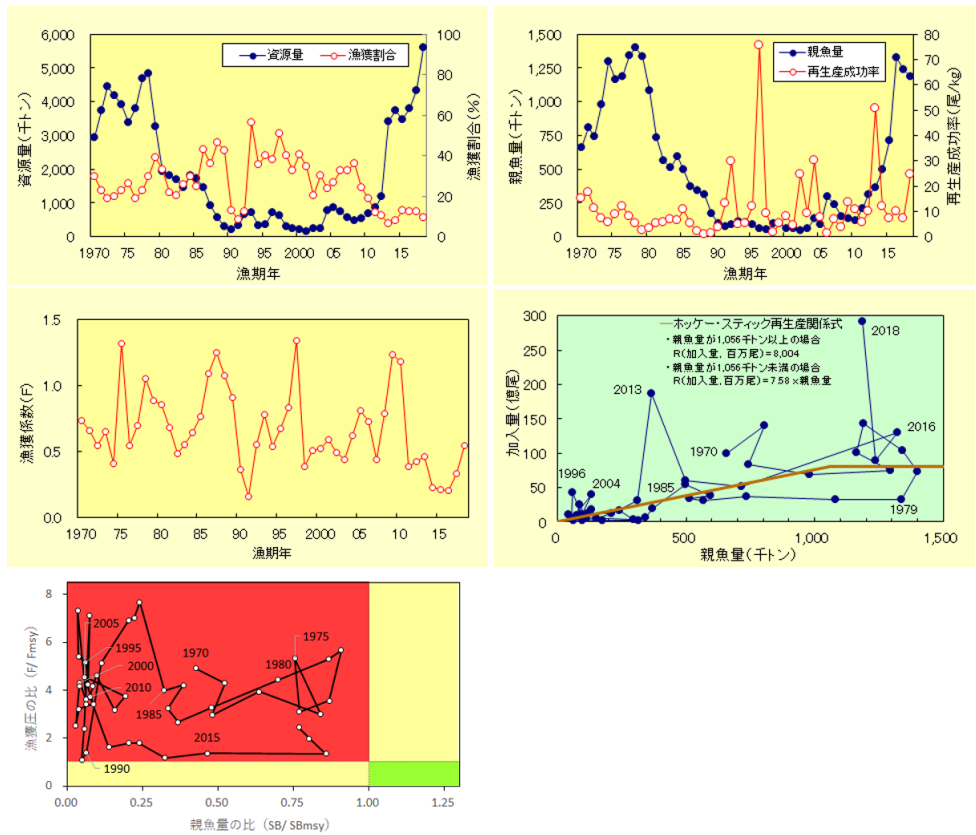


資源評価法

1970～2018年漁期の資源量を、7～翌年6月の漁期を年単位とする年齢別漁獲尾数を使ったコホート解析により推定した。最近年の漁獲係数(F)は、加入量および親魚量を反映すると考えられる4系列の指標値を用いてチューニングを行って推定した。自然死亡係数は0.4とした。北太平洋漁業委員会に提出された中国およびロシアの漁獲量も考慮した。

資源状態

資源量は1970年代には300万トン以上の高い水準であったが、1980～1990年代に減少し、2001年漁期には15万トンまで落ち込んだ。その後、2004年漁期の高い加入量と漁獲圧低下により増加し、2013年漁期の極めて高い加入量により2013年漁期は341万トンとなり、その後もさらに増加し2018年漁期は560万トンであった。親魚量は2000年前後は極めて低い値で推移したが2011年漁期以降、増加傾向を示し、2018年漁期は119万トンであった。漁獲係数(F)は、1997年漁期、2009・2010年漁期に高い値を示したが、近年は比較的低い値を示している。再生産関係にはホッケースティック型を適用した。最大持続生産量(MSY)は37.2万トンと推定された。MSYを実現する親魚量(SBmsy)は154万トンで、2018年漁期親魚量(SB2018)はこれを下回っており、SBmsyに対する2018年漁期親魚量の比は0.77である(SB2018/SBmsy=0.77)。2018年漁期のFはMSYを実現する漁獲圧(Fmsy)を上回っており、Fmsyに対する2018年漁期のFの比は2.48である(F2018/Fmsy=2.48)。親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から増加と判断される。



資源評価のまとめ

- 2018年漁期の資源量は560万トン、親魚量は119万トン
- 2018年漁期の親魚量は SB_{msy} (154万トン)を下回っている ($SB_{2018}/SB_{msy}=0.77$)
- 2018年漁期の F は F_{msy} を上回っている ($F_{2018}/F_{msy}=2.48$)
- 親魚量の動向は近年5年間 (2014～2018年漁期)の推移から増加と判断される

執筆者: 由上龍嗣・西嶋翔太・井須小羊子・上村泰洋・古市 生・渡部亮介

上記の再生産関係はMSYを実現する親魚量および漁獲圧を算出するため、研究機関会議での検討を踏まえて提案したものである。

資源評価は毎年更新されます。